

障子と日本建築

—— 柔らかな光に隠された 出生の秘密

黒沢 隆

「障子」という言葉を聞いただけで、何か心なごむものがなかるうか。

柔和で清らかな明るさが心をみたくれる。ことに冬の障子は美しい。太陽高度がさがって、冬の陽は庇の奥の奥まで届くのである。すっかり葉が落ちて枝だけになった庭木の影がうつり、木枯しにゆれる。樹々をわたる鳥さえ、障子に影をおとすのである。

ぼんやり、それをながめているだけで、冬の日の心のごみがある。

実は過保護に育てられて、子供のころよく風邪をひき、学校を休まされた。うつらうつらしながら、日かな障子にうつる冬の情景をながめて過ごすしるめたい充足感が思いだされる。あたくも蔭のなかに幼体を安んじるような錯覚にもとらわれ、大人になってつらい思いを味わうことに、すぎ去った日々は美しさをます。

「障子」とはもともと仕切りというほどの意味だ。

それは天皇のすまいでさえ一堂一室的な様相を色濃くもち、複数の「堂」をつなぎ合わせて用途の複雑に対応してきた平安朝の建築術からの離別を意味したもの、といえよう。

お雑さまは、古代貴族の生活ぶりを、よく今日につたえてくれる。

まず、屏風を背に内裏(だいら)さまだけが畳に座っているが、これは当時の貴人のありのままの生活だ。畳は綿のない時代の

布団だった。ガランとした板貼りの室内に布団のように畳を敷いて「場」をつくり、屏風や几帳(きちょう)で囲う。十二単衣をいくら重ねても、これでは寒かったろう。室内には窓ひとつさえない塗込(ぬりごめ)の区画が「納戸」としてつくり、ここに逃げこむようにして寝たのだった。

その屏風や几帳を屏障具(びょうしょうぐ)と言って総称するのだが、一堂一室をこれで仕切って寒さに耐える生活は、鎌倉時代になってもほとんど改善されない。上級武士のすまいでさえ、あいかわらず部戸(しとみど)を下からつきあげて棒でつかえて止め、内には御簾(みす)をたらしして風の吹込みを防いだ。

様相が一気に変わったのは、おそらく15世紀(室町時代)だ。銀閣寺東求堂は、今日に残された唯一の激変期の遺構である。

まず、畳が床一面に敷詰められるようになった。「座敷」が成立したのである。

また、室内を仕切るような溝が天と地に彫られ、襖を建込むようになる。これは屏風をハメ込んだと考えるとよい。「屏風障子」などともいわれた。

さらに、部戸は舞良戸(まゆらど)にかわって、柱から柱に引違いで建込まれた。実は溝がもう一本内側に彫ってあって、ここに「明り障子」も建込まれたのである。

室町時代の日本にあって、こうして「引き」形式の建具が登場することによって、「座敷」という名の部屋がはじめて成立したのである。「部屋」とは生活の区切りに対応した空間の区切りである。プライバシーの意識とか、その生活のシーンにふさわしい「場」とかの意識が、実にこの部屋と対応することによって、こうして出来あがってきた、といえよう。まことに革命的なこと、と言わなければならない。

かつて、部戸は上吊りの「開き」形式の戸であった。唯一の間仕切りだった納戸の入口も、横吊りの「開き」形式の戸だった。

この「開き」形式は、地球上のあらゆる住居に実によくみられるものだ。西欧でも、同じような時期に「部屋」を成立させるのだが、これも「開き」形式の扉によって、壁で仕切ってなされている。これに反し、「引き」形式とは、日本でだけ発想され、日本にだけ発展した独自のものなのである。

以降、日本の建築は、この「開き」形式の建具の発展と深化とに密接に関連しながら、さらに、その独自性を追求してゆくことになるのである。

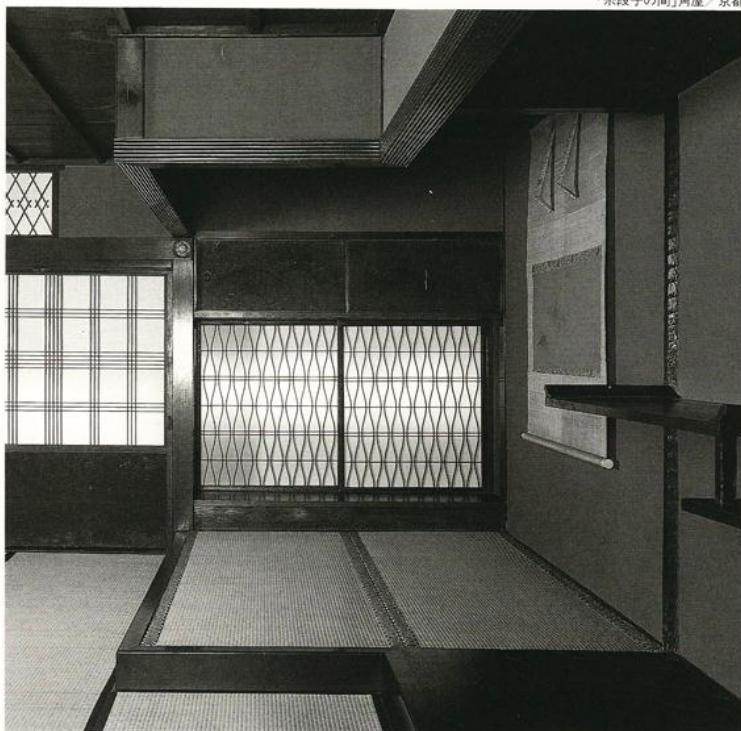
たとえば、東求堂の段階では座敷の外はすぐ濡れ縁の回廊だった。やがて、もっと深く低く庇をまわされて、「縁側」となって、人の通りみちの役割もなるようになる。この外縁に一筋(ひとすじ)というレールが仕込まれ、戸袋にためてある雨戸をどんどんと繰り出して被うようにもなった。

この段階で、障子は柱から柱までいっばいに建込まれて、座敷は、今日の様相にすいぶん近づいた。

ご存知であろうが、座敷には「真」「行」「草」という格式上の区別がある。書道の「楷書」「行書」「草書」の区分にも似て、城中の大広間のとるべき様式と、客間のとるべき様式、そして私宅の私室と、様式的な区別がなされているのである。たとえば障子についてみると、まず、腰の高さに、それがあらわれた。

今日では見慣れた障子に腰はない。それに、上から下まで6コマ割りが標準的だ。これは市販の障子紙が9寸2分(28センチ)のロールだからだが、当時、おそらく半紙を8寸に切りそろえて、一枚ずつ貼っていたに相違ない。かく、腰がなければ7段なの

「糸段子の間」角屋／京都



だが、大広間では上3段だけ、客間では4段、私室では5段、紙貼りが出来るようにするのが作法である。その腰も、大広間では襖仕立、しかも外周材(框と棧)は黒の漆塗りときまっていた。組子は、もちろん白木でないと糊が利かなくて障子紙が貼れないが、そのために付子(つけこ)を外周材に沿ってまわして、二重マフタにした。

つまり、塗ってもいない障子にわざわざ付子を廻すというのはアウトであり、付子を廻す以上、組子割はタテ長の繁骨(しげぼね)にすべきなのであって、四民平等(士農工商みな対等)以降の社会では、こんな障子をつくっても納める建物さえないのである。

こんな格式主義にそれぞれ戦闘的に反発した人々のことを数寄者(すきしゃ)という。

数寄者はこうして世に席をしめることになるが、権力者とおかかえ番匠(ばんしょう＝権威ある大棟梁のひきいる工人集団)を相手に大立廻りを演じたという訳ではない。世俗を絶ってひとり草むした隠居に遁塞(ひっそく)するのである。その隠居に工夫をこらして自らの宇宙をつくりあげようというのである――。

それは、格式主義のなかで作法となったさまざまな記号、たとえば黒は「真」、あづき色は「行」、もえぎ色は「草」……などという記号とその意味を、逆手にとってこれを操作しようとする。考えるだに面白そうなこと

だ。数寄屋に作法はないといまだに公言されるが、権力格式主義の方が作法に満ち満ちているから、実は、その作法を横目でにらんでいるのである。

さて障子だ。数寄者はついに腰のまったくない障子―水腰障子―をつくりあげて、しかも黒縁りの置(真)と組合せ、その黒縁りは通常の7割に幅を細めて、構成されることになった。襖で、これと同じ性格を負っているのが、貼りくるみ襖にほかならない。障壁画を描かれた襖(真)でも、唐紙(行)でも、色紙(草)でもない襖は、ペロンとしてフチもなく、激しく反格式を主張しているのである。いずれも、作法を知っているから見て分かって、瞭然となれる、というものだ。すさまじい闘志ではないか。

ところがである。私は最近気付いて、ほんとに瞭然としたのだが、なんと銀閣寺東求堂の、座敷に一本溝で入っているのは水腰障子だ。遺構に残されているかぎり、障子第一号は、水腰障子なのである。格式主義と反格式主義とは、たとえば珠光や紹鷗や利休が、右手と左手とを使い分けでもするように、ひとりでも両方つくったもの、ということがどうも正確な理解であるようだ。

刻々と組織化され不動の体制となる武家社会にあって、反格式主義は、皇室や貴族たちが夢を結んで遊びほうけた世界でもあったのであろう。

くろさわ・たかし(建築設計家)

1941年、東京生まれ。日本大学大学院理工学研究科・博士課程修了。現在、日本大学理工学部講師(建築論)。芝浦工大、山脇学園短大、東海大学、東京芸術大学などの講師を歴任。黒沢隆研究室を主宰して、居住施設を中心に設計活動をする。著書に「住宅の逆説」(生活編・匠編)レオナルドの飛行機出版会、「建築家の休日」(前編・後編)丸善、「窮りゆく近代建築」彰国社、「近代・時代のなかの住居」リクルート出版、など他多数。

■障子とは…

障子は古い歴史をもつ建具で、昔は「明り障子」と呼ばれていました。その名称どおりに、大きな機能のひとつとして採光があげられます。障子越しに入る光はデリケートで柔らかく室内に表情豊かな空間を生み出します。また、間仕切りとしても、文字通り紙一重で内と外を仕切る役目を果たします。保湿、通気にもすぐれ、四季の著しい変

化にも適応性がある建具といえます。デザインのパリエーションも豊富で、和室のみならず、洋空間にも多く用いられます。

①紙の材質による分類

□手漉き障子紙

障子紙の最高級品。楮などの天然靱皮繊維を原料として手間をかけてつくられる。風合い、丈夫さともすぐれている。

□機械漉き障子紙

マニラ麻・ビニロンなどの混抄障子紙、レーヨン障子紙、レーヨン入り障子紙、バルブ障子紙など機械で化学繊維や合成繊維を漉き込む。量産でき最も需要が多い。

□プラスチック障子紙

レーヨン障子紙にプラスチックフィルムで両面をはさみラミネートするか、裏面からラミネートしたもの。風雨にも破れない強度があり、断熱効果も高い。

②組子による分類

□横繁障子

横方向に多く組子が入っているもの。

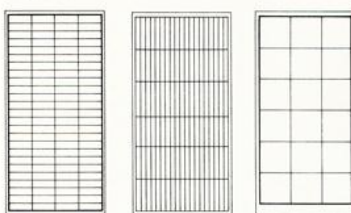
□縦繁障子

縦方向に多く組子が入っているもの。

□荒間障子

組子の間隔を荒くとしたもの。

〈横繁障子〉 〈縦繁障子〉 〈荒間障子〉



●障子紙の寸法

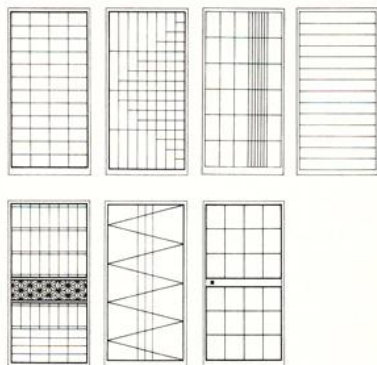
種類	寸法	2尺×3尺	3尺×6尺	小巻 (2尺×1.8尺)	太巻 (3尺×6尺)
手漉き障子紙		無地もの柄もの	無地もの柄もの	無地もの柄もの	
機械漉き障子紙				無地もの柄もの	無地もの柄もの
プラスチック障子紙			無地もの柄もの		

※小巻・太巻は機械漉きの技術が開発されて出来た商品でメトリック表示されている。

③外観による分類

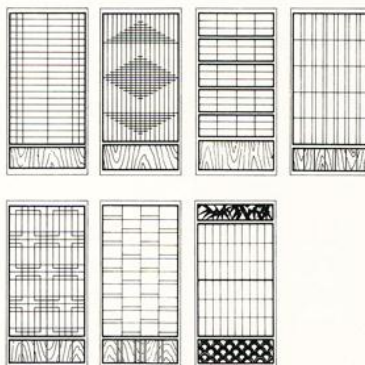
□水腰障子

腰板のついていない障子紙だけの障子。



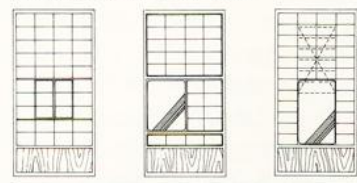
□腰付障子

下部に腰板を張った障子。



□猫間障子

障子の下にガラスを嵌め、小障子を上げ下げ、または左右に引き分けるようにしたもの。関東では雪見障子という。



〈継ぎ目障子〉

昔の障子紙は手漉きの小判だったことから、5厘〜1分の重ねで継ぎ、その継ぎ目が棧の間にくるように配して貼られた。一枚貼り障子紙や長尺巻き障子紙の出現で、現在は茶室の障子の決まりごととなっているくらいで一般には少なくなってきている。